

深夜ラジオの常連リス
ナーが隣で飲んでいた
男に声でバレて防音室
で朝まで鳴かされるカ
ントボーイ

「——ヨルノトリ。今週も来てくれたんだな」

布団の中で太腿をきつく押し合わせた。金曜深夜一時。部屋は真っ暗で、スマホの灯りすらつけていない。暗闇の中に秋月さんの低音だけが流れ込んできてくる。鼓膜を震わせ、耳の奥をくすぐり、脊髄をじわりと伝い——まっすぐ下腹に落ちた。

「"秋の夜の匂いについて。金木犀の甘さと排気ガスの苦さが混じると、東京の夜は少しだけ泣いているように匂う"——」

俺の文章だ。俺がたった二百字に凝縮した言葉を、この人の声が読み上げている。

「——この人の言葉は、いつも俺の知らない角度から世界を見せてくれる。ヨルノトリ、ありがとう」

心臓が跳ねた。ハンドルネーム。それだけなのに——名前を呼ばれた瞬間、身体のコがじわ♡と熱を帯びる。

(やめて……っ♡ 声だけで、こんなふうになるの……っ♡♡)

カントが疼いている。イヤホン越しの低音が鼓膜を揺らすたびに、下着の奥がじんわりと湿っていく。男の身体なのに、ここだけが——このどうしようもない場所だけが、秋月悠真の声に反応する。

太腿の間がぬるい。

パンツの布地が肌に貼りつく感触。その生ぬるい密着に、喉の奥で小さく呻いた。

(気持ち悪い……っ♡ 声聴いてるだけで濡れるとか……おかしいだろ……っ♡♡)

自分の身体を持て余す感覚は、もう何年も変わらない。男として生きてきた。男として扱われて、男の制服を着て、男の更衣室を使ってきた。なのにこの場所だけが——スマホから流れる誰かの声ひとつで、こんなにも簡単に裏切る。

秋月さんの「おやすみ。来週も、ここで」が聞こえて、放送が途切れた。

イヤホンを外す。天井が暗い。自分の呼吸音だけが部屋に落ちる。

太腿の間の熱が引くまで、俺はずっと目を開けたまま動けなかった。

*

翌日の夜。下北沢の路地裏。

就活のストレスで眠れなくて、友人に引きずられるままバーに来てしまった。「ランプ」という看板の小さな店。カウンター八席だけの薄暗い空間に、レコードの針がジャズを拾っている。

友人は別の知り合いを見つけてあっさり離脱した。一人になったカウンターでハイボールを啜る。氷がグラスに当たる澄んだ音だけが近い。

隣の席に、背の高い男が座っていた。

黒いタートルネック。肩幅が広い。長い指がロックグラスを持ち上げている。バーテンダーと低い声で何か話していた。

ぼんやりとその声を聴いていた。聞き流していた——はずだった。

「いつものやつ」

男がバーテンダーにそう言った瞬間、俺の全身に鳥肌が立った。

この声。

この、「つ」の音に触れる舌の位置。語尾がわずかに掠れる癖。母音が胸腔の深いところで共鳴してから広がる独特の響き。

毎週金曜の深夜一時に、イヤホン越しに聴いてきた声だ。

(——秋月、さん……?)

グラスを持つ手が震えた。心臓が耳の裏でどくどくと暴れている。偶然？　だけど半年間、毎週欠かさず聴き込んできた声を聞き間違えるはずがない。

逃げなきゃ。立ち上がらなきゃ。このまま隣にいたら——匿名の関係が壊れる。「ヨルノトリ」じゃなくなる。

なのに、足が動かない。

椅子に縫い付けられたみたいに、俺はその声の隣から離れられなかった。

「一人？ 友達は？」

声をかけられた。隣の男——秋月さんが、こちらを見ている。

「帰りました」

自分でもわかるほど声が小さい。

「聞こえない」

秋月さんが身を寄せてきた。カウンター越しの距離が縮まる。黒い服の肩が近い。ほんのかすかに——煙草じゃない、サンダルウッドに似た木質の温かい匂いが鼻先を掠めた。

「……帰りました、友達」

「そうか」

ラジオの軽妙な口調とは全然違った。言葉が少なくて、間が長い。酒を飲むペースがゆっくりで、ときどきバーの音楽に耳を傾けるように目を細める。

「何してる人？」

「大学生です。就活中で」

「きつい時期だな」

それだけ。短い言葉が低い声で落ちて、それだけで胸がきゅっと詰まった。

（この人だ。毎週俺の文章を読んでくれてる人が、今、隣にいる）

正体を明かすべきか。でもそれは「ヨルノトリ」という殻を脱ぐことだ。匿名だから書けることがある。顔が見えないから差し出せる本音がある。

「……お仕事は？」

「声の仕事」

それ以上は言わなかった。俺も聞けなかった。

バーテンダーがレコードを変えた。ピアノトリオの静かなイントロが流れ出す。

「この曲、好きだ」

秋月さんがグラスに口をつけながら呟いた。

「ビル・エヴァンスですよね」

言ってしまうてから、しまったと思った。秋月さんが驚いた顔でこちらを見る。

「詳しいな」

「……深夜に音楽聴くのが好きで」

濁す。誤魔化す。あなたの番組で紹介されたから聴き始めた、なんて言えるわけがない。

秋月さんの視線が、じっと俺の横顔に留まっているのがわかった。見返せない。グラスの中のハイボールが微かに揺れている。

ポケットの中でスマホが震えた。

「すみません」

取り出す。画面に「真夜中通信」のアプリ通知。来週の投稿締め切りのリマインド。タップした拍子に、下書き中のテキストが表示されてしまった。

——「バーのカウンターで隣に座った人の声が、イヤホンの中の声と同じだった」

隣から、息を呑む気配。

秋月さんの目が、俺のスマホの画面に釘付けになっていた。

慌ててスマホを胸に抱き込む。遅い。もう遅い。

「……ヨルノトリ？」

その声は、ラジオの声でもバーでの声でもなかった。掠れて、震えて、剥き出しの——

「違います」

声が裏返った。

秋月さんの瞳の色が変わっていく。驚き。理解。そして——飢えたような熱。

「お前、ヨルノトリだな」

立ち上がろうとした。椅子が軋んだ。その瞬間、手首を掴まれた。

大きな手だ。長い指が俺の細い手首を一周して余っている。指先の圧が皮膚越しに脈を数えるみたいに食い込んで、熱い。掌の体温が表皮の下にじかに染み込んでくる。

(——っ♡♡)

手首を握られただけで、カントがじわ♡と疼いた。秋月さんの体温が、声と同じ経路を辿って身体の芯にまで届く。

「待て。逃げるな」

「離して……ください」

震える。声も、手首も、膝も。

秋月さんが手を離した。でも目は離さない。切れ長の瞳が、薄暗いバーの照明の中でじっと俺を射抜いている。

「半年間、お前の文章を読んできた。声を聴きたいと思ってた。顔を見たいと思ってた。それが——隣に座ってた」

一歩下がった。背中がカウンターの壁に当たる。

「俺は……ただのリスナーで——」

「ただのリスナーは、毎週俺のラジオに魂削った文章を送ってこない」

レコードの針が跳ねて、音楽が途切れた。バーの空気が変わる。バーテンダーがこちらを窺うような目を向けている。

「——外、出ませんか」

秋月さんが静かに言った。

深夜二時の下北沢。十月の夜気が肌を刺す。金木犀の匂いが——俺が投稿に書いた、あの匂いが、路地裏に漂っていた。

バーのドアを出た瞬間に走り出そうとした。

「待ってくれ」

背後からの声。イヤホン越しじゃない。空気を震わせて直接届く低音。

足が止まる。

(だめだ……っ♡ この人の声聞いたら……身体が……っ♡♡)

カントに熱が灯る。声だけで。たった一言で。太腿の奥がじわっ♡と滲んだ感覚に、唇を噛んだ。

(おかしい……おかしいだろ俺の身体……っ♡♡ イヤホン越してもこうなのに、生の声聴いたら……っ♡♡)

「話がしたい。それだけだ。近くに俺の収録スタジオがある。静かだし、誰もいない。五分だけ」

断るべきだ。頭ではわかっている。

でも秋月さんの目が——ラジオの声と同じ温度で、俺を見ている。

気づいたら歩き出していた。秋月さんの半歩後ろを、まるで毎週金曜の深夜にイヤホンの先についていくみたいに。

レンタルスタジオのビル。エレベーターは使わず、非常階段を上がった。秋月さんのカードキーがドアを開ける乾いた電子音が、深夜のビルに小さく響いた。

防音ブース。

ドアを開けた瞬間、世界から音が消えた。

三畳ほどの狭い空間。壁全面が吸音パネルに覆われている。卓上のコンデンサーマイク、ヘッドフォン、小型ミキサー。外界の音が完全に遮断されて、自分の呼吸と心臓の音だけが異様に大きく耳を打つ。

二人が入ると、互いの体温がすぐに届く距離だった。

秋月さんがドアを閉めた。

外の音が消える。完全な密室。

「お前の文章が好きだった」

秋月さんが椅子に座り、俺に向き合った。低い声が防音室の壁に吸い込まれて、反響しない。その代わり、声がまっすぐ俺の鼓膜だけに届く。遮るものが何もない。残響のない裸の低音が、耳の奥に直接注がれる。

「毎週の投稿を読むのが、この仕事を続ける理由になってた。お前が誰で、どんな顔で、どんな声で——ずっと知りたかった」

「……知ったら、失望しますよ」

「しない」

即答。まっすぐな声。

苦笑が漏れた。「そう言う人は多い。でも——」

秋月さんが立ち上がった。一步。それだけで俺の目の前に来る。身長差十三センチ。見上げる形になった。黒いタートルネックの胸板が視界を塞ぐ。

「俺の声で書いてたよな。あの投稿——"バーのカウンターで隣に座った人の声が、イヤホンの中の声と同じだった"。……お前、俺の声に反応してるだろ」

息が止まった。

凶星だ。秋月さんの低音が防音室の中でどこにも逃げ場なく俺の耳に届いて、鼓膜をじかに震わせて——カントが疼く。太腿をきつく閉じた。

秋月さんの目が、その動きを捉えていた。俺の太腿が擦り合わさるのを。

「何を隠してる」

「何も——」

嘘だ。身体が嘘をつかせてくれない。秋月さんの声が一音落ちるたびに呼吸が乱れて、耳朶が灼けていくのが自分でわかった。

長い指がパーカーのフードを引いた。首筋が露わになる。冷えた空気が白い肌に触れて、毛穴がざわりと粟立った。

(やめ……っ♡♡ 近い……この人の匂い……バーで嗅いだのと同じ……♡♡)

そして——秋月さんの唇が、俺の耳元に寄せられた。

「——お前の声を聞かせてくれ」

低音が耳の穴に直接注がれる。

「ッ……♡♡」

全身に鳥肌が走った。膝が震える。カントから蜜が溢れた——じわっ♡じゃなくて、とろっ♡と。下着を濡らし、スキニーの内側にまで染みが広がっていく感触がはっきりとわかった。

後退る。背中が壁に当たった。吸音パネルの柔らかい感触。逃げ場がない。

「やめて……近寄らないで……わかってしまう……っ」

秋月さんの大きな手が俺の肩を掴んだ。

「何がわかる」

涙が出た。自分でも理由がわからない。ただ、もう隠しきれないという恐怖と——隠さなくてよくなるかもしれないという、どうしようもない期待が、胸の中でぶつかって砕けた。

「俺の身体は——普通じゃないんです。あなたの声を聴いて、こんなに——こんなに濡れてしまう身体は、男として——」

声が途切れた。「濡れる」という言葉が防音室の空気に落ちて、どこにも反響しないまま、秋月さんの耳に届いた。

秋月さんの手が止まった。

「……濡れる？」

長い沈黙。俺は両手で顔を覆った。終わった。全部終わった。気持ち悪いと思われる。化け物だと——

手首を掴まれた。顔から手を剥がされる。涙で滲んだ視界の向こうに、秋月さんの顔があった。近い。切れ長の目の奥に、嫌悪はなかった。

「見せてくれ」

「嫌です……っ」

「——頼む。お前の全部を知りたい」

秋月さんの声が震えていた。

命令じゃない。懇願だ。パーソナリティとしての余裕もクールさもかなぐり捨てた、剥き出しの声。マイクの前で聴かせるために整えられた声じゃなくて——素の、怖がっている声。

(……この人も、怖いんだ)

俺の手が、震えながらスキニーのボタンに触れた。

「俺がやる」

秋月さんの手が俺の手の上に重なった。指が長い。ボタンを外す。ジッパーを下ろす。ゆっくりと。金属の歯が一つ一つ外れる音が防音室に静かに落ちていく。

スキニーが膝まで下りて、下着が晒された。

グレーの布地の真ん中に、濡れた染みが浮いていた。

秋月さんの目がそこに落ちた。そして、もう少し下——俺の下着のラインの向こうにある、男の身体にあるはずのない輪郭に。

秋月さんの指が下着の縁に触れた。俺が首を振る間もなく、そっと引き下ろされる。

小ぶりなペニスの下に——秋月さんの声で♡濡れて♡光る♡花卉。

秋月さんが息を呑んだ。

「気持ち悪いでしょう。男なのに——こんな身体——」

声が涸れた。もう泣くことすらできなかった。ただ、見られている。一番隠したかった場所を、一番知られたくなかった人に。

（どうせ引かれる……っ♡♡ 男のくせにこんなものがあるなんて♡♡ 気持ち悪いって言われる……っ♡♡）

秋月さんが跪いた。

百八十三センチの身体が、俺の前で膝をつく。俺の腰の高さに、秋月さんの顔がくる。

「きれいだ」

「——え？」

「お前の身体が俺の声で濡れるなら——もっと鳴かせてやる」

息がかかった♡